

二〇二三年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙（B入試） 【国語】

二〇二三年一月十四日 実施 ※解答は解答用紙に記入すること。 「五枚のうち その一」

※句読点（、）や記号などは、すべて一字として数えます。

【一】 つぎの文章は、芥川龍之介「白」（一部改）の一部である。以下を読んで、あとの問いに答えよ。

その途端に毘が飛んだのでしよう。続けさまにけたたましい黒の鳴き声が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足を止める①気色もありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散らし、往来どめの縄を擦り抜け、ごみための箱を引っくり返し、振り向きもせずに逃げ続けました。御覧なさい。坂を駆けおりのを！ そら、自動車に轢かれそうになりました！ 白はもう命の助かりたさに夢中になっているのかも知れません。いや、白の耳の底には未だに黒の鳴き声が蛇のように唸っているのです。

「Aきやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

白はやつと喘ぎ喘ぎ、主人の家へ帰って来ました。黒塀の下の大ぐりを抜け、物置小屋を廻りさえすれば、犬小屋のある裏庭です。白はほとんど風のように、裏庭の②芝生へ駆けこみました。もうここまで逃げて来れば、毘にかかる心配はありません。おまけに③あした芝の上には、幸いお嬢さんや坊ちゃんもボール投げをして遊んでいます。それを見た白の嬉しさは何と云えばいいのでしょうか。白は尻尾を振りながら、一足飛びにそこへ飛んで行きました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ 今日は犬殺しに遇いましたよ。」

白は二人を見上げると、息もつかずにこう云いました。（もつともお嬢さんや坊ちゃんには犬の言葉はわかりませんから、わんわんと聞えるだけなのです。）しかし今日はどうしたのか、④お嬢さんも坊ちゃんもただ呆気にとられたように、頭さえ撫でてはくれません。白は不思議に思いながら、もう一度二人に話しかけました。

「お嬢さん！ あなたは犬殺しを御存じですか？ それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！ わたしは助かりましたが、お隣の黒君は掴まりましたぜ。」

⑤それでもお嬢さんや坊ちゃんは顔を見合せているばかりです。おまけに二人はしばらくすると、こんな妙なことさえ云い出すのです。

「どこの犬でしょう？ 春夫さん。」

「どこの犬だろう？ 姉さん。」

どこの犬？ 今度は白の方が呆気にとられました。（白にはお嬢さんや坊ちゃんの言葉もちやんと聞きわたることが出来るのです。我々は犬の言葉がわからないものですから、犬もやはり我々の言葉はわからないように考えていますが、実際はそうではありません。犬が芸を覚えるのは我々の言葉がわかるからです。⑥我々は犬の言葉を聞きわたることが出来ませんから、闇の中を見通すことだの、かすかな匂いを嗅ぎ当てることだの、犬の教えてくれる芸は一つも覚えることが出来ません。）

「どこの犬とはどうしたのです？ わたしですよ！ 白ですよ！」

けれどもお嬢さんは相変わらず気味悪そうに白を眺めています。

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバットをおもちやにしながら、考え深そうに答えました。

⑦「こいつも体中まっ黒だから。」

白は急に背中が逆立つように感じました。まっ黒！ そんなはずはありません。白はまだ子犬の時から、牛乳のように白かったのですから。しかし今前足を見ると、——いや、前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足も、すらりと上品に延びた尻尾も、みんな鍋底のようにまっ黒なのです。まっ黒！ まっ黒！ 白は気でも違ったように、飛び上ったり、跳ね廻ったりしながら、一生懸命に吠え立てました。

「あら、どうでしょう？ 春夫さん。この犬はきっと狂犬だわよ。」

〈 略 〉

お嬢さんや坊ちゃんに逐い出された白は東京中をうろろ歩きしました。⑧どこへどうしても、忘れることの出来ないのはまっ黒になった姿のことです。白は客の顔を映している理髪店の鏡を恐れました。雨上りの空を映している往来の水たまりを恐れました。往来の若葉を映している飾窓の硝子を恐れました。いや、カフェのテーブルに黒ビールを湛えているコップさえ、——けれどもそれが何になりましたか？ あの自動車を御覧なさい。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗りの自動車です。漆を光らせた自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映しました。——はつきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待ちの自動車のように、いたるところにある訳なのです。

⑨もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覧なさい。白は苦しうに唸ったと思うと、たちまち公園の中へ駆けこみました。

公園の中には鈴懸すずかけの若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を垂たれたなり、木々の間を歩いて行きました。ここには幸い池のほかには、姿を映すものも見当りません。物音はただ白薔薇しゅばらに群れる蜂はちの音が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、しばらくは醜い黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかし⑤そう云う幸福さえ五分と続いたかどうかわかりません。白はただ夢のように、ベンチの並んでいる路みちばたへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたたましい犬の声が上がったのです。

「きやん。きやん。助けてくれえ！ きやあん！きやあん。助けてくれえ！」

白は思わず身震いをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はつきり浮ばせたのです。白は目をつぶったまま、元来た方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間のことです。白は凄すさまじい唸り声もを洩らすと、きりりとまた振り返りました。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

この声はまた白の耳にはこう云う言葉にも聞えるのです。

「きやあん。きやあん。臆病おくびょうものになるな！ きやあん。臆病ものになるな！」

白は頭を低めるが早いか、声のする方へ駆け出しました。

けれどもそこへ来て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。ただ学校の帰りらしい、洋服を着た子供が二三人、首のまわりへ縄をつけた茶色の子犬を引きずりながら、何かわいわい騒いでいるのです。子犬は一生懸命に引きずられまいともがきもがき、

「B助けてくれえ」と繰り返していました。Ⅰ子供たちはそんな声にⅡを貸す気色もありません。ただ笑ったり、怒鳴ったり、あるいはまた子犬の腹を靴で蹴ったりするばかりです。

白は少しもためらわずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。

へ 略 へ

「Cさあ、おれと一しよに来い。お前の家まで送ってやるから。」

白は元来た木々の間へ、まっしぐらにまた駆けこみました。茶色の子犬も嬉しそうに、ベンチをくぐり、薔薇を蹴散らし、白に負けまいと走って来ます。まだ首にぶら下った、長い縄をひきずりながら。

二三時間たった後、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と佇たぎっていました。昼も薄暗いカフェの中にはもうⅢ電燈でんとうがともし、音のかすれた蓄音機は浪花節ななわふしか何かやっているようです。子犬は得意そうに尾を振りながら、こう白へ話しかけました。

「僕はここに住んでいるのです。この大正軒と云うカフェの中に。——おじさんはどこに住んでいるのです？」

「おじさんかい？ おじさんは——ずっと遠い町にいる。」

⑥白は寂しそうにため息をしました。

「Dじやもうおじさんは家へ帰ろう。」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？ なぜまたそんなことを尋ねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜はここに泊って行つて下さい。それから僕のお母さんにも命拾いの御礼を云わせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレーライスだの、ビフテキだの、いろいろな御馳走ごちそうがあるのです。」

「ありがとう。ありがとう。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。——じやお前のお母さんによろしく。」

白はちよいと空を見てから、静かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはずれに、三日月もそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんと云えば！」

子犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云うのです。ナポちゃんだのナポ公だのとも云われますけれども。——おじさんの名前は何と云うのです？」

「おじさんの名前は白と云うのだよ。」

「白——ですか？ 白と云うのは不思議ですね。」

Ⅲ

白はⅣが一ぱいになりました。

二〇二三年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙（B入試） 【国語】

二〇二三年一月十四日 実施

※解答は解答用紙に記入すること。 「五枚のうち その三」

※句読点（、）や記号などは、すべて一字として数えます。

「それでも白と云うのだよ。」

そのち、白はたびたび人命を救い、勇ましい一匹の黒い「義犬」として色々な新聞で伝えられることとなる。

〈 略 〉

ある秋の真夜中です。体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰って来ました。もちろんお嬢さんや坊ちゃんはどうに④床へはいつています。いや、今は誰一人起きているものもありますまい。ひっそりした裏庭の芝生の上にも、ただ高い棕櫚しゅろの木こすえの梢に白い月が一輪浮んでいるだけです。白は昔の犬小屋の前に、露に濡れた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういう独語ひとりごとを始めました。

「お月様！ お月様！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまっ黒になったのも、大かたそのせいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申してから、あらゆる危険と戦って来ました。それは一つには何かの拍子にすすよりも黒い体を見ると、臆病を恥じる気が起ったからです。けれどもしまいには黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、あるいは火の中へ飛びこんだり、あるいはまた狼と戦ったりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪われません。死もわたしの顔を見ると、どこかへ逃げ去ってしまうのです。わたしはどうとう苦しさの余り、自殺しようと決心しました。ただ自殺をするにつけても、ただ一目会いたいのには可愛がって下すった御主人です。⑦もちろんお嬢さんや坊ちゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きつとまた野良犬と思うでしょう。ことによれば坊ちゃんのパットに打ち殺されてしまうかも知れません。①それでも⑥本望です。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見るほかに、何も願うことはありません。そのため今夜は②うもう一度ここへ帰って来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会わして下さい。」

白は独語を云い終ると、芝生にあごをさしのべたなり、いつかぐっすり寝入ってしまいました。

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだろう？ 姉さん。」

白は小さい主人の声に、はつきりと目を開きました。見ればお嬢さんや坊ちゃんは犬小屋の前に佇んだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目をまた芝生の上へ伏せてしまいました。お嬢さんや坊ちゃんは白がまっ黒に変った時にも、やはり今のように驚いたものです。あの時の悲しさを見ると、——白は今では帰って来たことを後悔する気さえ起りました。するとその途端です。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこう叫びました。

「Eお父さん！ お母さん！ 白がまた帰って来ましたよ！」

白が！ 白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでしょうか。お嬢さんは両手を延ばしながら、しつかり白の首を押えしました。同時に白はお嬢さんの目へ、じつと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳に③え犬小屋が映っています。高い棕櫚の木のかげになったクリーム色の犬小屋が、——そんなことは⑧当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には⑨米粒ほどの小ささに、白い犬が一匹すわ坐っているのです。清らかに、ほっそりと。——白はただ⑩恍惚こうこうとこの犬の姿に見入りました。

問一 傍線部①「気色」②「芝生」③「逆立つ」④「床」⑤「本望」の読み方をひらがなで答えよ。

問二 傍線部A「きやあん。きやあん。……」、B「助けてくれえ」、C「さあ、おれと一しよに来い。……」、D「じゃもうおじさんは……」、E「お父さん！ お母さん！……」はそれぞれ誰のせりふか。適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を何度選んでも良いこととする。

ア 黒 イ 白 ウ ナポレオン エ 春夫 オ 姉 カ 大正軒の御主人

問三 空欄①あ②えにあてはまることばとして適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えよ。

ア 赤々と イ 青々と ウ 緑々と エ ありありと オ はるばると カ えんえんと

二〇二三年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙（B入試） 【国語】

二〇二三年一月十四日 実施 ※解答は解答用紙に記入すること。 「五枚のうち その四」
※句読点（、）や記号などは、すべて一字として数えます。

問四 傍線部①「お嬢さんも坊ちゃんもただ呆氣にとられたように、頭さえ撫でてはくれません」とあるが、それはなぜか。適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 白の言葉を聞き分けることができなくなっていたから。
イ 急に見知らぬ犬がやってきてわんわん吠え始めたから。
ウ 隣の家の黒が大殺しに捕まったことが不思議だったから。
エ 興奮して息もつかず話す白を見て呆氣にとられたから。

問五 傍線部②「それでもお嬢さんや坊ちゃんは顔を見合せているばかりです」とあるが、その時の二人の心情をあらわす二字の熟語として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 不快 イ 困惑 ウ 恐怖 エ 歓喜 オ 安心

問六 文中にいくつかある空欄 ㉠ に共通して当てはまる語として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア しかし イ なぜなら ウ それでも エ だから

問七 傍線部③「こいつも体中まっ黒だから」とあるが、白はなぜ自分の体が真っ黒になったと思っているのか。四十字以内で説明せよ。

問八 傍線部④「もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう」とあるが、なぜ「恐れる」のか。三十字以内で説明せよ。

問九 傍線部⑤「そう云う幸福」とあるが、どのような幸福か。二十字以内で答えよ。

問十 空欄 ㉡、㉢ は身体の一部が当てはまる。適切なことばをそれぞれ漢字一字で答えよ。

問十一 傍線部⑥「白は寂しようにため息をしました」とあるが、この時の白の心情として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。
ア 茶色の子犬には大正軒という立派な家があるのに、自分の家は粗末な大小屋で、そこにすら帰れないことをうらめしく思っている。
イ 自分と同じ孤独な境遇の子犬を見つけたと思ったが、助けた茶色の子犬には帰る家と家族がありうらやましく感じている。
ウ 自分の家を紹介する茶色の子犬によって、家が遠いだけでなく帰ることもできないことを実感させられ切なく思っている。
エ 茶色の子犬は幼く、触れて欲しくない過去について聞いてきたため辛いことを語らなければならないことを悲しく思っている。

問十二 空欄 ㉣ にあてはまる台詞として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア おじさんはどこも黒いじゃありませんか？ イ おじさんには色の名前がついているのですか？
ウ おじさんの名前に聞き覚えがありますね？ エ おじさんが清らかな心を持っているからですね？

問十三 傍線部⑦「もちろんお嬢さんや坊ちゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きつとまた野良犬と思うでしょう」の「もちろん」のかかっている（修飾している）部分として適切な箇所を選び、記号で答えよ。

- もちろん ⑦ お嬢さんや坊ちゃんは ⑧ あしたにも ⑨ わたしの姿を見ると、
きつとまた ⑩ 野良犬と ⑪ 思うでしょう。

問十四 傍線部⑧「当然に違いありません」とあるが、どういうことか。適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 当然ではないかも知れない イ 当然かもしれない ウ 当然ではない エ 当然である

二〇二三年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙（B入試） 【国語】

二〇二三年一月十四日 実施 ※解答は解答用紙に記入すること。 「五枚のうち その五」
※句読点（、）や記号などは、すべて一字として数えます。

問十五 傍線部⑨「米粒ほどの小ささ」とあるが、なぜこのような表現をしたのか。適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 遠くにいるから イ やせ細ったから ウ 瞳に映っているから エ 存在感がないから

問十六 傍線部⑩「恍惚」の意味として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア ぼんやりと イ うっとりとして ウ げんなりと エ ほつそりと

問十七 この文章の作者である芥川龍之介の作品として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 人間失格 イ 吾輩は猫である ウ 羅生門 エ 雪国 オ 恩讐の彼方に

【二】 あとの問いに答えよ。

問一 次の傍線部の漢字が正しければ○を、正しくなければ正しい漢字に改めよ。

- ① あの先生に師事する。
- ② 彼は終止沈黙を守った。
- ③ 野性の動物に出会った。
- ④ 製品の大量生産をする。
- ⑤ 消化器関が弱っている。

問二 次の単語と同じ性質を持つものをあとから選び、記号で答えよ。

- | | | | | |
|-------|--------|--------|--------|--------|
| ① 黒い | ② うろうろ | ③ 嬉しさ | ④ 静かだ | ⑤ 驚く |
| ア 大きな | イ だ | ウ お嬢さん | エ あらゆる | オ きりりと |
| カ やはり | キ 恐ろしい | ク 元気だ | ケ 帰りたい | コ 鳴く |

問三 次の①～⑤の四字熟語の意味として適当なものをあとから選び、記号で答えよ。

- ① 付和雷同 ② 我田引水 ③ 温故知新 ④ 朝三暮四 ⑤ 快刀乱麻

- ア 自分に都合のよい言動をすること
- イ 口先だけでごまかすこと
- ウ 一定の考えもなく人の意見に賛成すること
- エ もつれた物事をてきぱき解決すること
- オ 過去から新しい知識を得ること
- カ 感じるものがなく興味がわかないこと